

ウツホの像



桓崎由梨

ウツホの像

THE EMPTY WOODEN STATUE

(1)

山道から充分に森の奥へ入った場所で、北澤は荷を降ろし、幅広く深い穴を一つ掘った。叔父の遺骨と、カーテンでくるんだマリカの体を横たえるための穴を。

平日の山の中は、しんとしていた。

小鳥のさえずりや、カラスの鳴き声すら聞こえなかった。

邪魔な下草を引っこ抜き、木の根をシャベルで寸断しながらの作業は、思っていたよりも重労働だった。たちまち背中に汗が噴き出す。額から流れ落ちる雫を、彼は何度も袖口で拭った。

人目を避けるためには、夜来たほうが良かったのかもしれない。だが、彼は山のことを何も知らない。夜、どんな危険があるかわからないような場所へ一人で来たことはなかった。闇を突いて現れるものが、たとえ貧相な野犬一匹に過ぎなかったとしても、それを叩き伏せるだけの知恵や技術が彼にはない。ましてや、気の荒い猪などに出くわした日には、どうなることかわかったものではなかった。

地面を掘り返すたびに、むっとするような土の匂いが地中から立ちのぼった。落ち葉が腐ったような匂い。都会の人間には馴染めない、強烈な野趣を感じさせる匂いだ。

山の好きな渡瀬や守谷なら、いい匂いだと言うに違いなかった。が、北澤には鬱陶しいだけだった。重く湿った土の匂いは、なんとなく、小学生の頃、遠足で山へ登った時のことを思い出させた。

そういえば、守谷は昔からよく森の絵を描いていたなと北澤は思った。あいつは作品が何枚かたまると、必ず、おれに見せてくれたものだ。「こつこつという地味な絵は絶対に売れないだろうなあ」そう言いながらはにかむように笑っていたが、その顔には、自分の好きなものを誠実に描いている者の純朴さがあつた。飾り気のない、魅力的な男がそこにはいた。おれは、あの頃の守谷が好きだった。無二の親友だと思っていた…。

土の山にシャベルを突き刺すと、北澤は、足元に置いていた等身大の荷を抱き起こした。布でくるまれたマリカの体。それを穴へ投げ込み、骨壺を脇へ安置した。再びシャベルを手にとり、湿った土砂を穴の中へ戻していった。地面が元通りになるまで靴の底で踏み固め、引っこ抜いた雑草を植えなおした。適当に落ち葉を撒き散らし、カモフラージュした。

全てをやり終えると、シャベルを担いでその場から離れた。細い山道を辿りながら、自動車道路を目指して急いだ。

森の空気は、彼の肺には濃過ぎた。ざらざらした芳香、
フィトンチッドの刺激が胸の中を掻きむしる。

逃げきれぬのだろうか、と北澤は思った。マリカがいなくなつたことを知れば、守谷は必ず追ってくる。烈火の如く怒つて、おれを問いつめることだろう。しらを切り続ける自信はない。今の守谷は、マリカのためならどんなことでもやってしまう。昔はそんな人間じゃなかった。だが、今ではすっかり変わってしまった。叔父と出会ってから、マリカを知ってから。そうなるように仕向けたのはおれだ。僅かばかりの欲得のために、おれは今、無二の親友を失いかけている。

汗だくになりながら、北澤は車道へ出た。道路に他の車の姿はなかった。しんとしていた。どこかでヒョドリがキエーッと癩にさわる声で鳴いていた。大空はすでに薄暗い。秋の日は急速に暮れつつあった。レガシィ・ツーリングワゴンの後部ドアを開け、泥まみれのシャベルを投げ込むと、少しだけ気分が落ち着いていた。

マンションへ戻る気はなかった。全てのほとぼりが冷めるまで、しばらくこの街から離れなければならない。

仕事 どうにもならない。放っておくしかないだろう。クビになったらフリーライターとして食ってゆくか、あるいは別の職種を探せばいい。

文章で食えないのなら、別の仕事をすればいい。この不景気じゃ、ろくな仕事にはありつけないだろうが。

帰るに帰れない北澤にとって、愛車は唯一の武器だった。移動し、生活するための大切な家。運転席のドアに手をかけた時、近くでエンジン音が響いた。反射的に耳と目で探す。前方の、カーブで死角になっていた場所から、見覚えのある4WDが姿を現わした。守谷のパジェロだった。あつげにとられているうちに、パジェロは速度をあげて、北澤に向かって突っ込んできた。彼は慌てて車の側から離れた。二台の車は、凄まじい音をたてて衝突した。中古のレガシイの車体前部が、ものの見事に押し潰された。

(逃げろ)

本能がそう命じたが、この山の中、車も無しにどこへ逃げるといいのか。

パジェロのドアが開き、中から守谷が飛び出してきた。手には散弾銃を持っていた。いつも野山の猟で使っている、愛用の水平二連銃だ。

「動くなよ、北澤」

守谷は腰ために銃を構え、勝ち誇ったように言った。

「この銃にはバクシヨットがこめてある。当たればまずたになる。おとなしくしていたほうが利口だぞ」

バクシヨット

北澤は思わず呻いた。「おれは子熊や

猪じゃないんだぞ。そんな弾、どうするつもりだ」

「マリカをどこへやった。あれはおれのものだ。なぜ勝手に連れ出した」

「マリカはおまえのものじゃない、叔父のものだ」北澤は叫んだ。「叔父はおまえに、あれを譲るなんてひとも言っちゃいない。勝手に持ち出したのはおまえのほうだ。恥ずかしくないのか、こんな真似までして。そんなに大事なのか、あのまがいものの女が」

守谷の瞳に暗い色が滲んだ。

次の瞬間、守谷は散弾銃を水平に振って、青黒く光る銃身で、北澤の右頬を殴り飛ばした。

北澤は、吹っ飛ぶように道路の上に倒れた。立ち上がるうとすると、今度は背を殴られた。一瞬、気が遠くなつた。が、ほどなく右手に加わつた強い衝撃と、激烈な痛みに強引に意識を引き戻された。

うつ伏せに倒れたまま、北澤は、呻き声を洩らしながら目を開けた。右手の甲は、銃の台尻で押さえつけられていた。背中が靴の底で踏みつけられ、身動きがとれなくなっている。口の中には血の味が満ちていた。激痛が、拍動するように指先から伝播してくる。指の骨を折られてしまったのかもしれない。北澤は歯ぎしりして後悔した。こんなことなら、あんなに早々と、車にシャベルを放り込むのではなかった。あれがあれば、多少の抵抗はできたのだ。

「どこかに埋めたか、捨てたんだろう?」守谷は落ち着き
払った様子で訊ねた。「でなきゃ、おまえが山なんかに来
る筈がない。平日の、こんな夕方に」

「東京へ行ってたんじゃないのか」北澤は訊ねた。「まさか、
仕事の約束をほったらかして、後をつけてきたんじゃない
だろうな」

「だったら何だって言うんだ」守谷は笑った。「最近のおま
えの態度には、腑に落ちないところが多かったからな。人
を雇って見張らせてたんだ。携帯電話に、随時連絡を入
れさせてな。引き返してきて正解だったよ。すぐにここが
わかった。もしかしたら、マリカが呼んでくれたのかもし
れないな……」

「フリーの絵描きは信用が第一なんだぞ。こんなことをし
て、仕事をなくしたらどうする!」

「仕事なんて、才能さえあればどんどん入ってくるさ。だ
がそのためにはマリカが必要なんだ。マリカさえいれば、
おれはいくらでも絵が描ける　さあ言え、マリカをどこ
へやった?」

「おまえなんかに、マリカを渡すもんか　」

「腕が片方なくなるぞ、北澤」守谷は、北澤の右肘に銃口
を押しあてた。「ショットガンをこの距離から撃ったらどう
なるか、おまえだって知らないわけではあるまい」

冷たい山の空気が、北澤の肺の底まで入り込んできた。

が、体が震え始めたのは、そのせいだけではなかった。

本気なのだろうか。守谷は本当に撃つ気なのか。拷問してまで、おれにマリカの居場所を吐かせるつもりなのか。あんなに仲の良かった親友に対して　いや親友だからこそ、自分の邪魔をされたことに対して、これほどまでに腹を立てるのか。

「足をのけてくれたら話そう……」北澤は、わめき出しそうになるのを必死にこらえて持ちかけた。「ついでに、その物騒なモノを退けてくれないか」

右肘を圧迫していた筒先が離れていった。が、依然、背中では踏みつけられたままだった。北澤は、乾き切った口の中を舌の先で舐めて続けた。「マリカは確かにこの山へ埋めた。場所は、おれの身の安全を約束してくれたら話す。約束を守れるか？」

こんなやり方に納得したわけではなかった。が、まずは身の安全を確保しなければならぬ。全てはそのあとの話だ。

守谷が黙って足をあげた。北澤は右手を庇いながら立ち上がった。目が眩み、足元が揺れた。指は、少し動かしただけで、言葉を失うほどに痛んだ。背中にも、熱く重い痛みが残っている。足元に吐き捨てた唾の中には、まだ、うつすらと赤い色が混じっていた。

「案内しろ、マリカを埋めた場所まで」守谷は銃口で北澤

の背を突いた。「そこまで行ったら解放してやるっ」

「約束だぞ」

「守るさ。おまえを殺したって、何の得にもならんのだからな」

耳につく甲高い声で守谷が笑った。まるで、北澤の知らない男のような声で。

(2)

「趣味で彫刻を始めたんだ。一度、作品を見に来てくれな
いか？」

北澤が、母方の叔父・渡瀬和義わたせ・かずよしから電話で誘われたのは、三年ほど前のことだった。その頃も秋だった。芸術の秋とかいうやつで、またぞろ変なものに興味を持ったのかな、と思いつつ、北澤は自分の部屋のカレンダーに目をやった。

「来週の日曜ならあいていますがおれが見てもわかるよ
うなやつでしょうね？ 首が異様に長いのか、手足が針
金みたいに細いのか、男か女かわからんような塊とか
は……」

渡瀬は、北澤の言葉を途中で制した。「オーソドックス
な木彫りだよ。絶世の美女だ。全裸の立像だぞ。見に来
い、絶対に気に入るから」

昔から手先が器用だった渡瀬は、北澤が子供の頃、木
で動く戦車を作ったり、竹トンボを作ったりして、よく一
緒に遊んでくれたものだった。北澤の父親は、学校の教師
だったくせに、そういうことにはひどく無関心で、彼は当
時から、遊びのことになると叔父の渡瀬になついていた。

渡瀬は、退屈することに耐えられない類の人間だった。

だから、始終、何かをしていた。日本中が好景気だった頃には、証券会社勤務であることを利用して、得体の知れない連中と一緒に株の仕手戦に手を染めていた。そして、分不相応なほどの財を成した。

渡瀬の妻・章子^{あきこ}は、そんな渡瀬の性格をいつも気に病んでいた。幾らお金を儲けても、あの人の心には安らぎというものが皆無だと呟いた。

北澤は、叔母に向かって慰めの言葉をかけながら、心底では彼女のことを笑っていた。何もわかっていない女だと軽蔑した。叔父はなぜ、こんな潔癖な女と結婚してしまったのだろうか、不思議に思えて仕方がなかった。

「甲沢^{かぶとさわ}のログハウスにいるから、そこへ来てくれ。そうそう、一緒に芸術に目の利く友達を連れてきてくれると、尚嬉しいんだがなあ。その人達にも、作品の出来を見て貰いたいから」

「先生に習ってるんじゃないんですか？ 立像っていうのは、かなり、でかいものなんでしょう？」

「我流なんだよ。だから、誰かに見て貰うのは、これが初めてなんだ」

彫刻に詳しい人間と言われても、北澤には、とっさに思いつかぶ人物がいなかった。そういう人間とは、あまり交流が無いのだ。

北澤は、隔週発行雑誌《EX》の取材記者で、事件・政治班を担当している。

《EX》は、読者の好奇心を煽るような、どぎつい犯罪事件や政治家のスキャンダルを追い回し、センセーショナルに書き綴ることを目的にしている、北澤の父親に言わせれば「極めて低俗な」、北澤自身の言葉で言えば「庶民のガス抜きのな」存在だ。

仕事の内容は殆どが取材活動で、執筆の機会は、たまにしか巡ってこない。北澤の職場では、記事の作り方に「データアンカー・システム」という方法が取られており、データマンと呼ばれる取材記者が取ってきた情報を、アンカーと呼ばれる執筆者が原稿におこすことで、誌面作りを行っていた。

北澤のような二十代後半の若い記者の場合、主たる仕事の内容は「データマン」である。たいして大きくもない会社なので、取材費の大半は、当然のことながら自腹を切ることになる。おまけに北澤のように、本業と並行して個人的な取材をもとにルポルタージュをコツコツと書いているような人間にとっては、金は幾らあっても足りなかった。ルポルタージュの執筆は、北澤にとって息抜きであり、同時に慰めでもあった。データマンの仕事ばかりやっているうちに、自分でも記事を書きたいという欲求が膨らんできて、いつしかその捌け口を求めるようになったのだ。

会社の仕事のための取材費、自分の原稿を書くための取材費、北澤一人で賄えるはずがない。その穴を、いつも埋めてくれるのが渡瀬だった。渡瀬は頼めばいつでも金を貸してくれた。しかも無利子で。但し、利子の代わりに渡瀬の頼みを聞いてやる必要があるのは、毎度のことだった。

芸術に目の利く人間ねえ……。

北澤は短縮ダイヤルで、イラストレーターの守谷光二もりや・こうじに電話をかけた。守谷は北澤の友人で、社会へ出てから知り合った得難い親友だ。映画関係のメーリングリストで知り合い、オフ会で顔を合わせてからは、いつそう親しくつき合うようになった。メールのやり取りで互いの性格や趣味は知っていたものの、実際に会ってみると住所も近いことがわかり、なおいつそう意気投合した。そのうち、仕事で顔を合わす機会にも恵まれた。《EX》の「コラム」の挿絵を、一時期、守谷のデザイン事務所が請け負うことになったのだ。しかも描き手は、守谷自身だった。

守谷が電話口に出ると、北澤はまず訊ねた。「今、手あいてるか?」

「ああ」電話の向こうで、守谷は元気な声を出した。「仕事ならさつき終わったところだ。今なら何でも聞くぞ」

守谷は、自宅では、油絵やアクリル画を描いていること

が多い。デザイン事務所では主にCG画像を扱っていたが、本来の彼のライフワークは、油絵とアクリル画を描くことだった。速乾性の絵の具や接着剤を使っている時に電話を掛け、北澤は一度、守谷から、こっぴどく怒鳴られたことがある。当たり前前の話だが、当時絵のことに無知だった北澤は、耳を打つ罵声に仰天し、受話器を持ったまま凍りついてしまった。守谷のことを、それほどアグレッシヴな男だったのかと誤解して、しばらくは、口をきくのも恐れていたほどだった。誤解は後日、守谷の笑い声と共に氷解した。以来北澤は、電話をする際には、まず彼が仕事中心であるかどうかを、昼夜の別を問わず確認するようになっている。

「おれ、立体ものを、ちゃんと評価をできる自信は無いんだけどなあ」

渡瀬の話を書くと、守谷は、困惑したような声を出した。守谷は、絵画一本でやってきた男だ。彫刻・彫塑の分野にも目は通しているものの、専門的な批評知識は持ち合わせていないとのことだった。

北澤は、笑いながら答えた。

「適当に誉めとけばいいんだよ。日曜芸術家の作ったもんだ。どうせ、出来なんて知れている。お世辞の一つくらい、おまえにだって言えるだろう」

「わかった。じゃあスケジュールを調節しておくよ」

「頼むぜ」

「その代わり、今度、一杯おごれよ」

「ビール券、何枚分ぐらいで手を打つ？」

「馬鹿を言え。上等のスッチだ」

甲沢のログハウスは、渡瀬が建てたものではない。他人から買い取ったものだ。

元の持ち主は、転勤で今は北海道にいる。管理を頼む相手も財力もなく、かといって壊すのも惜しいということ、で、売りに出したのだ。

ログハウスが渡瀬のものになってから、北澤も何度か小屋を訪れた。山にも小屋にも興味はなかったが、自分だけの秘密基地を持って嬉々としている渡瀬の心境だけは、よく理解できた。

小屋の隅には、いつまでも放置されている荷物が一つあった。二メートルぐらいの長さの、油紙に包まれた大きな荷物だ。北澤が中身について訊ねると、渡瀬は「ガラクタだよ」と言っていて笑った。

渡瀬は、ログハウスのことを家族には内緒にしていた。北澤も誰かに話すことはなかった。渡瀬がログハウスに若い女の子を連れてゆこうが、そこで怪しげな遊びに耽ってしようが、北澤には関係のないことだったし、それをネタに彼を強請^{ゆす}することも勿論可能ではあったのだが、そんなこ

とをするまでもなく、北澤が無心すれば、渡瀬は必ず、幾許かのものを寄越してくれたのだ。

「これはすごい。こんなに本格的なものとは、思いませんでしたよ」

ログハウスの居間で立像を目にした途端、守谷は、我を忘れたように声をあげた。北澤も同感だった。確かに、人呼びつけるほどのことはあると思った。

《マリカ》というタイトルがついたその立像は、若い女性の立ち姿を写實的に彫ったものだった。髪型はショートボブ、ほうそりとした面立ちの《マリカ》は、アーモンド型の綺麗な両眼を薄く開き、何かを追うような表情で片足を前に出している。上方を見つめるように顎を上げ、両手を前へ差し出していた。その両腕は、何かを包み込むように丸く形作られ、もしそこへ誰かを抱かせたら、そのまま乳房も露な胸の中へ、しっかりと抱きとめてしまいそうな雰囲気漂わせていた。彫像の表面にはニス塗られ、ぴかぴかに磨かれていた。触れると、木材特有の、ほっとするような暖かさと柔らかさが伝わってきた。

「テーマは、女性の愛の深さですか？」守谷が渡瀬に訊ねた。「僕には、そんなふうに見えますが」

渡瀬は、にやりと笑ったきり答えなかった。四十年代半ばの、したたかな男が漏らした笑いの意味を、守谷がどう受けとめたのか。北澤は、少しばかり興味を覚えた。

「《マリカ》というのは、どっぴろい意味なんですか」守谷は訊ねた。

「意味なんてないさ」渡瀬は、さらりと云ってのけた。「女の名前だと思って貰ってもいいし、作品そのものの名前だと思って貰ってもいい。でも、ぴったりの名前だろう」

「ええ」

「口の中で繰り返していると、それ以外の名前では有りえないような気がしてくる」

「そうですね」

「出来のほうはどうか。美大へ行くと、彫刻や彫塑をやっている生徒が大勢いるんだろう。それと比べてみて、どんな感じなのかな？」

「美大の教授も吃驚　といつたところでしょうか」守谷は微笑んだ。お世辞ではなく、本当に感動した時に浮かべる笑みだった。「渡瀬さん、この像、公募に出されたらいかがですか。これなら、結構、いい線まで行くと思いますよ。応募先なら幾つか覚えがあります。今度、FAXで一覧表をお送りしましょうか」

「いや、悪いが、そういうことに興味はないんだ」

「なぜですか？」

守谷の表情が、理解できないなあという類のものに変わった。才能を持っているのにそれを世に対して問わないというのは、守谷にとっては理解できない感情だ。しかし、

渡瀬は、瓢然として取り合わなかった。

「彫刻は、わたしの個人的な趣味だからね。賞という付加価値は、全く必要ないんだ。この作品の真価を理解できる人間が一人二人、ああいいなあと思ってくれば、それで満足なんだ。今日は遠いところをどうもありがとう。《マリカ》も、わたし以外の人間に美しさを認めて貰えて、さぞ喜んだことだろう。そのうちまた何か作ったら呼ぶかもしれない。見て貰えれば光栄だ」

「また、お邪魔してもいいんですか？」

渡瀬は愛想良くそれを許した。口先だけの言葉ではないことが北澤にもわかった。渡瀬は他人に対する好き嫌いがはつきりしている。仕事の場合ならともかく、プライベートでは絶対に媚を売らないし、お世辞も言わない。それだけ、守谷の手柄を気に入ったということだった。

北澤のレガシィで街まで降りる途中、守谷は助手席で、何度も渡瀬の腕前を誉めた。きちんと勉強しないことを惜しいと言った。あの半分でも自分に才能があれば……とすら言った。

「渡瀬さんは、どういう仕事をしている人なんだ？ あんまりっぱなログハウスを持つてるなんて、随分、いいところの重役さんなんだろう？」

「医療機器メーカーに勤めてるんだ」北澤は、ステアリングを右へ切って、六甲山系特有の、きついカーブを曲がった。

視界に、色づき始めた紅葉が飛び込んできた。

守谷が続けた。「儲かってるのか。今、そういう業種は」「そこそこにはね。だが、叔父の資産の殆どは、昔、株で儲けたものだ。バブルがはじけるまでは証券会社において、裏で妙な連中とつき合ってた。そいつらと一緒に、いろいろと稼ぎまくっていたらしい。オンライン・トレーディングにも昔から詳しかったしな。少し前、金融不祥事や不況のせいで、銀行や証券会社がバタバタ倒れてた時期があっただろう。叔父も勤務先が倒産して転職した口なんだが、元来、世渡りの上手な人だからな。善良な同僚達を尻目に、すぐに今の仕事を見つけてきて、上々の生活を送っているわけさ」

「ああ……。おれにも、それぐらいの器用さがあつたらな
あ」

守谷は、後頭部を背もたれに軽く叩きつけた。

叔父のように器用な人間だったら。それは北澤も何度か考えたことだ。他人の原稿のためにデータを集めてくるような仕事ではなく、名刺に《ルライター・北澤隆史》と書けるようになる日を、彼は、何度夢想したことだろつ。

守谷も似たようなものだった。全国規模の展覧会で第一席に選ばれ、大きな仕事を引き受け、0号一枚の値段が何万円にもなるような絵描きになりたい。それが守

谷の夢だった。

同じ雑誌で仕事をして以来、北澤は守谷と、仕事以外の場でも飲みに行くようになった。電話で、くだらない話を延々と続けることもあった。

分野こそ違うものの、二人は、お互いの血の中に共通する匂いを感じ取っていた。それは時として、易々と憎悪を引き起こす源となるに違いない、肉親以上に濃い血の繋がりがだった。

知り合っただけでしばらくたつと、二人はお互いの家に行き、夜遅くまで飲みながら、いろんな話をするようになった。寝るのも惜しんで、何時間も話し込んだ。今よりも、まだずつと若かった頃の話だ。

守谷はデザイン事務所に就職し、食うための仕事を誠にこなしながら、コツコツと自分のライフワークに打ち込んできた男だった。普段は雑誌や実用書に挿絵を描いて生活しているが、本来は、最低でも50号はあるような、大きなサイズの油絵やアクリル画を描くことに喜びを見い出すタイプの人間だった。

優れたデッサン力で描き出されたモチーフを、頭の中で半抽象化し、再構成して、コラーージュのように画布の上に配置してゆく作風には、上質の幻想絵画と呼ぶに相応しい風格があった。北澤と出会った頃の守谷は、よく森の絵を描いていた。葉や木の実を抽象化したパーツを、

混み入った樹木の絵の上にちりばめて、楽しんでいた。数年前、北澤は守谷のマンションに泊まったことがある。

守谷の部屋には、木材と揮発油の匂いが満ちていた。キャンバスの木枠と画布の匂い、筆洗液や溶き油の甘い匂いが充満していた。それが守谷の生活の匂いだった。

「絵描きになると決めた時、不安じゃなかったのか？」

「不安？ そんなこと考えたことも無かったよ。若かったからね。情熱だけで飛びだしちゃった」

絵描きになる道以外考えたことは無いんだ、自分のグラスに酒を注ぎ足しながら、その時、守谷はそう呟いたのだ。瞳の奥で静かに燃えているものに、北澤は容易に、自分自身の情熱を重ね合わせることができた。

守谷の最大の武器は、その色彩感覚にあった。絵描きの才能には二種類あって、輪郭で物の本質を捉えるのが得意な人間と、色彩で物の本質を捉えるのが得意な人間がいるのだが、守谷は後者だった。100号の画布一面に絵の具をぬりたくった作品を見せられた時には、ただひたすら、その迫力に圧倒された。色彩のオーケストラ。色というものが、歌ったり笑ったりするものだということ、北澤は守谷の絵を通して初めて知った。

「おまえはどうなんだ。おまえこそ不安じゃなかったのか」
今度は、北澤が訊ねられる番だった。

「雑誌記者の仕事も大変なんだろう。世の中には、そういう仕事に偏見を持つてる奴もいるしな」

「ははは。実際、偏見を持たれても仕方がないようなことをやってるからなあ、うちの場合は」

北澤が関わっている雑誌《EX》は、はつきり言っていて二流の雑誌だ。誌名の「EX」は、exposure(暴露)の頭文字からつけられたのだ。もっとも社の方針によれば、そこにはextra(特別優良品)・excellence(優秀)・expression(思想の表現)等々、上品な意味も含まれているらしいのだが、編集長や、北澤たち現場の人間に言わせれば、そんなものは全て綺麗ごとだ。もし、彼の雑誌に相應しい単語を並べるとしたら、それはexcite(興奮させる)・刺激する)・explosion(爆発)・事件の勃発)といったあたりに落ち着くに決まっている。

だが、北澤はそれらの言葉が持つ荒々しさを、それほど嫌いではなかった。そういう仕事に性にあっているのだ。

「たぶん天職なんだよ」守谷は言った。「おまえには、書くことで社会の矛盾を追求してゆくような力が備わってるんだ。記者の仕事に向いているんだよ」

「独立して、フリーのルポライターになりたいと思うことならあるけどな。今すぐには無理だろうが、取材の経験を積んで、自由になる金をもっと貯めて、社会を見る眼を鍛えて、文章力をつけて　時期と機会が巡ってくればの

話だかな」

「どんなジャンルをやるんだい」

「犯罪関係だよ。社会の歪みや人間の本質を暴露するのに、こんないいジャンルはないからな。それに売れ線だし」

「本が出たら送れよ。真つ先に」

「おまえも有名になったら一枚送ってくれよ、サイン入りで売って儲ける気か？」

「他人に見せびらかすんだよ。『おれは守谷画伯と知り合いなんだぞ』ってな」

二人は、グレンフィディックの瓶を早々と空けてしまった。なおも飲みたがる北澤を、守谷は厳しく諫めた。北澤は嫌々ながらもグラスを置いた。アルコールや煙草への耽溺を本気で心配してくれる守谷には逆らえなかったし、その思いやりが嬉しくもあった。

守谷は酒豪だが煙草は吸わない。作品を描いている間は、その酒の量さえ減らして、スティックに自分を追いつめてゆく。北澤とは正反対のやり方をしている人間なので、気になるのだ。

「長生きしろよ」と、守谷は言った。「おれ達が大成するには、まだ時間が掛かりそうだからな」

「成功できるのかな、おれ達」

「できるわ」

「断言しちまうのか。すごい自信だな」

「人間は、自分のなりたいものになるように出来ているんだ。だから、自信をなくすのが一番恐い。自分のことを駄目な奴だと思い込むと、本当に駄目になってしまう。だからおれは、いつも、自分が成功する時のことしか考えないようにしている。そうしていると、すごく調子がいいんだ」

「おれには、よくわからん考え方だな」

「人それぞれだよ。おまえは、自分の好きなようにやればいいわ」

部屋にはベッドがなかったので、二人は、布団や毛布を適当に分け合って、カーペットの上で眠ることにした。

「おまえ、寝相はいいほうか？」と、守谷が訊ねた。

北澤は答えた。「いや、ぐるぐる転がるほうだ」

「そうか。じゃあ、ぶつかってきたら蹴飛ばすかも知れんから、覚悟しておいてくれ」

「そっちこそ、おれに押し潰されるなよ。おやすみ」

「おやすみ。明日の朝はサラダを作ってやるから野菜を食えよ。体のためだぞ……」

翌朝、守谷はものすごいボリュームの朝食を作った。中身のしっかり詰まった胡桃パン、熱い紅茶、ヨーグルト、チーズと何種類もの生野菜を使ったサラダ、ボイルした温かいソーセージ、半分に切ったグレープフルーツ、煮込んだプラム。

低血圧で寝起きの悪い北澤は、食卓の上を呆然と眺めた。「いつも、こんなに食ってるのか？ 朝から？」

「おまえは違うのか。毎朝、何を食ってるんだ」

「コーヒート、トースト一枚……」

「死ぬぞ、おまえ。三十になる前に」

二人は時々会って酒を飲み、時には激論を闘わせてストレスを発散させながら、それぞれの仕事やライフワークに熱中した。互いの幸運を祈り続けた。

北澤は、酒も煙草もやめなかったが、守谷の忠告を受け入れ、食事だけはきちんと摂るようになった。自分の仕事、結局は、体力勝負であることに気づいたからだ。事実、食べてさえいれば、体調はかなり良かった。入社年数が重なるにつれて、加速度的に増してゆく現場責任と忙しさの中で、栄養素は全て効率良く燃烧され、太る余裕など、どこにも存在しなかった。

幸運を信じて、二人は努力を続けた。が、どちらの成果も、芳しくなかった。北澤はいつまでたっても雑誌社のデータマンだったし、守谷は何度か公募で入選したものの、そこから先の見通しが立たず、かえって懊悩を深めていた。無理もない。この不景気である。少し前なら掃いて捨てるほどあった画廊も即売会も、今では、すっかりさびれてしまった。

入選の事実があるだけに、なぜ次の一步を踏み出せないのか、画廊に持っていったっても売れないのかと、守谷は時々、愚痴をこぼすようになった。北澤自身も、日々の仕事に追われ、遅々として進まないルポルタージュの執筆に、苛立ちを覚え始めていた。

二人が、渡瀬から《マリカ》を見せられたのは、ちょうど、そんな頃だったのだ。

前方の草叢から、けたたましい羽音をたてて、ウズラの
ような丸っこい体型の鳥が何羽も飛び立った。初冬の陽
射しに、茶色の羽が透けて金色に輝く。赤褐色の尾羽と
喉元の灰青色が、とりわけ強く目に焼きついた。

四方八方に散ってゆく鳥達に、渡瀬と守谷は、それぞ
れの銃で狙いを定めた。渡瀬はポンプ・アクション、守谷は水
平二連銃を好んで使う。三発の銃声が響いた。北澤がた
またま目を向けていた方角に飛んだ鳥が、空中でもんど
りうって羽毛を散らし、真つ逆さまに落下した。

犬が三羽の獲物を回収してきた。守谷は、一発撃って
二羽しとめていた。散弾だから、一回の射撃で複数の鳥
が落ちることが、たまにあるのだ。渡瀬は一発目を失中
し、二発目でしとめたことを心底悔しがった。

「守谷くんの腕は、もうわたしより上だな。最近わたしは
よく外すんだ。体がついてゆかなくなってきたのかな」

守谷はちょっと微笑してから、落とした鳥の肛門に、小
型ナイフを差し込んだ。中で心持ち捻ってから、ゆっくり
と手前に引き抜く。肛門から、刃の先端に引っ掛けられ
た鳥の腸が、ずるずると引き出された。生ぐさい臭気が
あたりにたちこめた。北澤は、少し離れたところから、

その作業を見物した。鳥の腸抜きを見るのは初めてだった。

ここ一年ほどで、守谷の生活は随分と変わった。デザイナー事務所の仕事ではなく、ライフワークとして描いていた絵が少しづつ売れ始め、いろんな仕事を受注するようになったのだ。書籍のカバー絵、企業のポスター。画廊でも絵が数点売れた。勿論、値札通りの金額で。一枚何十万円もする絵が、何枚も、すいすいと売れたのだ。

経済的に余裕が出てきたところで、渡瀬が狩猟への誘いをかけた。何にでも好奇心を覚える守谷は、すぐに夢中になった。免許をとり、しばらくはクレー射撃をやっていたが、やがて本物の猟に出始めた。

鳥の内臓を犬に食わせ、真赤な空蕨莢を拾うと、北澤たちは、渡瀬のログハウスへ引き返した。さっき撃ち落としした鳥は、コジユケイという名前の野鳥だと、守谷が北澤に教えた。丸々と太ってはいしたが、野鳥など食べたことのない北澤は、本当に旨いのだろうか、半信半疑だった。

ログハウスにはオープンがあり、コジユケイはその中で焼かれることになった。渡瀬は、こういうことにかけても極めて手際が良く、北澤たちにもコジユケイの羽をむしらせると、鳥の首を落とし、腹をたち割って中に香野菜を詰めこみ、オープンで、こんがりと焼きあげた。

三人は缶ビールのプルタブを引きあげた。肉のしまった

コシユケイと、丸いフランスパンを食べた。鳥は、北澤が思っていたよりもずつと旨かった。岩塩と胡椒だけの味つけだが、熱々に焼けているせいかな、山を歩いて空腹だったせいかな、街のレストランで食う鳥よりも旨く感じられた。渡瀬や守谷が猟をする理由が、ちょっとだけわかったような気がした。

「隆史も猟を始めればいいんだ」と、渡瀬は言った。「見るだけじゃ、つまらなかっただろう。おまえにも銃が撃てれば、鹿や猪、そう、熊狩りだって夢じゃないんだぞ」

「猟友会の人達と一緒にに行けばいいじゃないですか」北澤は、指先についた塩と鳥の脂を舐めながら答えた。「おれなんか、同行したってきつとムバばかりです。人を撃つちまうかもしれない」

「猟は気の合った仲間と一緒にやるもんだ。見ず知らずの人間と山へ行ったってつまらないよ。ここにいる二人なら、ベスト・メンバーさ」

「金がありませんよ」と、北澤は答えた。「守谷はいいけど、おれはただの貧乏記者だから」

「おれだって、そんなに売れてるわけじゃないさ」守谷がかさず応じた。が、その声に、独特の明るさと弾みがあることを、北澤は見逃さなかった。

自分より一歩先に出た者に、疎ましさや悔しさを覚えないと言えば、それは嘘になる。ジャンルこそ違うものの、

北澤も守谷も、同じ苦勞をしてきた仲だ。運のあるなしだと言ってしまうえばそれまでだが、なぜその運が、自分ではなく、守谷のほうへ行ったのかと考えると、無限の嫉妬地獄へ落ちてしまうので、北澤は極力、そう考えないようにしていた。

一本のラインを挟んで、その前に出た者と、未だにその後ろに留まり続ける者。北澤はただ、前に出た守谷の背だけを見ていたかった。守谷が振り返り、無邪気な笑顔を向けてくるのを、ラインの後ろで見たくはなかった。そういうふうな気を使われるのは、かえって鬱陶しくてたまらない。

「やっと一枚売れた。東京の画商だ。これからも、定期的に絵を見せてくれるってさ」

守谷が朗報を持ってきたのは、正月もあけてすぐの頃だった。渡瀬に《マリカ》を見せて貰ってから、まだ三カ月もたつてはいなかった。

「定期的についていうのは、いいものがあれば、その都度、買ってくれるってことなのか」

「たぶんね。こっちは全国展の入選通知だよ」

第一席や文部大臣賞ではなかったが、幾つかの入選作の中に守谷の絵が選ばれたのだ。かろうじて引っかけた感じなんだろう、と守谷は言った。自分では、まだ不本意な

部分があった作品だったから、と。

北澤は素直におめでとうと言った。そうしなければ、自分の足元が崩れ去ってしまいそうな気がしていた。北澤のほうは、たいした収穫もなしに年を越していた。仕事は相変わらず忙しく、暇を見つけて書いていたルポルタージユは使い物にならなくなった。ルポルタージユの公募入選者の作品が、彼の書いていた原稿の内容と、ものの見事に一致していたのだ。こうなると、全く視点を変えて書き直さなければならぬし、先発作品が見落としている事実を拾いあげてゆく作業も必要になってくる。手間のかかる作業に、更に、時間と知力と体力が要求されるようになってしまったのだ。発表の先を越されたのは、やはりシヨックだった。

東京で売れた絵の写真を見せて貰った時、北澤は一瞬「おやっ？」と思った。

そこにあっただのは、いつもの守谷の絵ではなかった。珍しく、女性のポートレイトを描いた作品だった。画材はアクリル樹脂絵具で、大きさは20号ぐらいか。赤を基調にした色彩は、絵画全体を眩しく輝かせ、描かれた女の黒い髪と白い肌を、強烈に印象づけていた。幻想的というよりも、たおやかで美しく、限りなく優しい雰囲気のある絵だった。

ああ、何か一つ山を越えたんだな。北澤は単純にそう

思い、それからふと感じた。守谷の奴、ひよっとしたら、誰かに恋をしてるんじゃないだろうか。

「いいじゃないか、金ならわたしが貸すぞ。まず、クレイから始めてみないか。面白いぞ。標的が空中で木端微塵になると、スカツとするんだ。ストレスなんか、一発で吹っ飛ばすぞ」

北澤は、渡瀬の強い勧めを丁重に断った。これ以上、渡瀬に借金をするのは気がすまなかった。渡瀬は、邪気のない親切心で金を貸してくれる人間ではない。必ず交換条件を言い渡してくる。利子を取らないかわりに××してくれ、××を見繕ってくれという要求を、北澤は何遍呑みこんできたことだろう。その都度ツテを頼り、時には自分一人で何とかし、渡瀬の望みに応えてきたのだ。

渡瀬は、自分の欲望に忠実な人間だった。欲しいものは、必ず手に入れるべく行動した。犯罪同然のあぶない橋を、北澤も渡瀬も何度渡ってきたかわからない。それでも尚、北澤が叔父から離れられなかったのは、取材費・生活費・遊ぶための金が欲しかったという、ただそれだけのことだった。人のことなど言えた義理ではない。自分も叔父と同じだ。自分が手に入れたいと望むもののために、薄暗い隘路を歩くことを厭わないだけだ。

渡瀬の誘いを適当にはぐらかすと、北澤はいつもの癖

で、飲み干したビールのアルミ缶を、ぎゅっと握り潰した。これが最後の一缶だった。渡瀬はとくにウーロン茶に切り替え、アルツールを醒ますかの如く黙々と飲んでいる。

守谷はバーボンに切り替え、ストレートで飲んでいた。

渡瀬は、にこやかに笑いながら言った。

「わたしの知人で、春先に君の絵を買っていった奴がいるだろう。家に飾ってたら、目の利く人間から誉められたそうさ。雑誌に載ってた君の写真とインタビュー記事を見せて、大いに自慢したそうさぞ。どこの取材を受けたんだ？」

「たいしたものじゃありません。公募情報誌の、入選者インタビューのコーナーに載ったんです」守谷は照れたような、それでいて自慢げな表情で笑ってみせた。「今までは、美術雑誌の入賞者一覧に、小さく名前が並ぶだけでしたからね。記者から電話が掛かってきた時には、吃驚しましたよ。最近は、どんなことでもインタビューに来るんですね。結局、あのあたりが転機になったんですが……」

「君には、もっと有名な絵描きになって貰わなきゃなあ。家の初期作品ってことになるよ、将来、高値で売れるんだろっ？ あれぐらいの小さな絵でも、何百万もの値打ちが出る」

「それは、ものすごく有名な絵描きになった場合だけです」守谷は笑った。「今のぼくのキャリアじゃ、壁半分塞ぐ

くらいの大きな作品を描いたって八十万そこらの値段です。0号が何万円もするような巨匠にならない限り、渡瀬さんのお友達が自慢できるようには、ならないと思います。が」

「でも、なってみせる自信はあるんだろう」

「勿論ですよ。ぼくは絵描きになることだけを考えてやってきましたんだから、これで駄目なら、首を吊るしかありません」

「あはは。あんまり思い詰めてくれよ。才能のある人間ほど早死にする、という言葉を思い出すじゃないか」

「思い詰めてるんじゃないくて、本気なんです」

「……まあ、幸運は、とりあえず君のところへ巡ってきたわけだし、あとは、運勢が開花してゆくのを、ゆっくりと待てばいいんじゃないかな」

「ええ。努力ばかりしていた時期を、僕は、ようやく越えたんですね。これからは、運や状況、いろんな要素が僕の背を押してくれることでしょう。これで、ちょっとは楽になれたのかな」

守谷はボトルを引き寄せ、からになつたグラスに琥珀色の液体を注ぎ込んだ。自分を縛りつけていたものから解放されたような顔つきで、旨そうにあおった。

北澤は低く呟いた。「努力はどんな時でも必要だぞ。忘れれば必ず足元を掬われる。どんなに有名になつたとし

ても」

「わかってるさ」守谷は、当然のことだと言わんばかりに続けた。「でも、人間、やっぱり努力だけでは駄目なんだ。最後には、運の強さがものを言うんだな。誠実に仕事を積み重ねてるだけじゃ、誰も振り向いてくれやしない。何か、ぱつと目立つような際立った出来事がなければ、一流の仲間入りはできないんだよ」

「何を言ってるんだ。誠実に積み重ねているからこそ、いい運も巡ってくるんじゃないか」

「突っかかるなよ。だったらそれを証明してくれよ、おまえ自身の体験で」

北澤は思わず言葉に詰まった。言い返そうとしたが、できなかつた。守谷の言っていることが当たっているだけに、目が眩むほどの怒りを覚えた。守谷に対してだけでなく、自分自身に対しても。

「まあまあ、一人ともよさないか」渡瀬が間に割り込んだ。「人生は長い。最後に誰が勝つかなんてことは、神様だつてご存知じゃないだろうさ。それより守谷くん、今度の射撃大会のことなんだが……」

その会話がきつかけになって、渡瀬と守谷は、射撃の話に熱中し始めた。

守谷は、射撃の専門用語や身ぶり手振りを交えつつ、クレーヤ狩猟の話を、渡瀬と共に延々と話し続けた。それ

からまた絵の話に戻ってきて、展覧会のことや、画廊主や他の画家の反応に関して、こと細かに話し始めた。

北澤は、守谷とつき合っているわりには、絵の販売についてはよく知らない。たまにぶらっと訪れる展示場で、両方の掌を合わせたぐらいの小さな絵が十万円単位で売られているのを見て、いったいどこの誰がこういうものを買ってゆくのだろうか　と、ぼんやりと考えてみたりするだけだ。

守谷がそういう世界の一角に身を置いていること、そこで成功しかかっている話を、北澤は何か、現実離れた出来事のように聞いていた。北澤にとっての守谷光二は、今でもまだ、雑誌でわかりやすい仕事をしていた頃の守谷光二であって、絵描きの守谷光二ではなかった。

それは、友人の出世を現実のものとして把握できない、狭量な人間のひがみに他ならなかったが、幸い北澤の頭には、それを認めるだけの冷静さが多少は残っていた。が、無論、事実を認めることと、己の感情の浄化や昇華とは別問題だ。わかっている分、むしろ苦痛はひどかった。はじめだった。親友に嫉妬している自分の感情を、北澤はピールの酔いと共に持て余していた。美しくたおやかに変化した守谷の絵。彼の上に訪れた幸い。舞い降りたミュージック。自分には、いったい、いつチャンスが巡ってくるのだろうか。一年先か十年先か。あるいは一生、夢見るだけで終わる

のか。

北澤は、バーボンのボトルに手を伸ばした。自分もストリートで飲み始めた。喉を焼く刺激の心地良さが、ついペースを上げさせた。

酔いの向こうに、渡瀬と守谷の会話が溶けてゆく。眩暈がして、天井が、ぐるぐると回り始めた。酒で嫉妬を焼き尽くしてしまうのだ。そう思って、なおもグラスに酒を注ぎ続けたが、手が震えてうまくゆかず、ボトルを握ったままテーブルに突っ伏してしまった。そして起き上がれなくなった。頭痛がひどかった。こんなにひどい飲み方をしたのは、久しぶりだった。

渡瀬と守谷の会話が、ぼんやりと鼓膜を叩いた。

「今夜は、ここに泊まってゆくのかね」

「ええ、でも北澤をどうしましょう。このまま、置いておくわけにもゆかないし」

「わたしが車で運んで行くよ。そのために、ウーロン茶で酔いを醒ましてたんだ」

「すみませんね」

「いいさ。それより一晩、ゆっくり彼女と楽しむんだな。明日も休みなんだろう?」

「あはは。照れるようなことを言わないで下さいよ。渡瀬さんだつて、今まで、ここに散々」

「あいつは魔物みたいな女だからな。一度肌を合わせれば、

離れられなくなっても当然さ

渡瀬が北澤をつれて車を出したあと、守谷はログハウスのテラスで椅子に掛け、酔いをがさめてくるのをゆっくりと待った。

周囲の樹木の間から、夕暮れ時の柔らかな光が差し込んでくる。微かに暖かい陽射しは、赤く燃えながら山の端に落ちてゆく、見えない太陽の存在を感じさせた。

斜めに差し込んでくる西日は、やがて急速に力を失い、冷え冷えとした空気があたりに漂い始めた。その頃になっても、守谷はまだ、テラスでじっとしていた。初冬の星座が昇ってくるまでのひととき、未だに天空に留まり続ける夏の星座　北十字の優美さに見惚れ、その先端が浸っている筈の銀河のきらめきを、実際に目で見える暗さになる前に、頭の中で想像した。

ログハウスの中へ戻ると、暖炉のある部屋で夜が更けるのを待った。

薪をくべることのできる本格的な暖炉は、元の持ち主の趣味でつけられたものだ。渡瀬もそれを気に入っており、きちんと管理しながら使っていた。渡瀬は、まめな作業が好きだ。もし芸術家になっていたら、自分よりも丁寧に仕事をする人間になっていたのではないかと、守谷は思

うことがある。

本格的な寒さの時期にはまだ遠いが、風邪をひいてはつまらないので、守谷は暖炉に火を入れた。オレンジ色に燃える薪が出す熱気と、木の焼ける匂いは、染み込むように身体に心地よかった。酒はもう必要なかった。すでに十分に飲んでいる。今は、穏やかに過ごしたいだけだった。守谷は思った。今日は、北澤に冷たくあたり過ぎてしまったかもしれない。あいつが、あんな酔い方をするのは珍しい。そこまで追いつめるつもりはなかった。彼を言い負かすつもりもなかった。ただ、今日、ここで一人になれる時のことを考えると、つい気持ちが高ぶってしまったのだ。

ようするに、おれは一刻も早く一人になりたかったのだと結論し、守谷は、他人には見せられないような、歪んだ表情で苦笑いを洩らした。北澤を早く帰らせたかった、その気持ちが言葉に刺を持たせてしまったのだろう。悪いことをしてしまった。だが、もう済んだことだ。あいつは、いつまでも根にもつタイプじゃない。そのうち、今日のこととは忘れてくれるだろう……。

守谷は、暖炉の脇の安楽椅子に腰をおろした。背もたれに体を預け、うとうとしながら、時が流れるのを待った。

室内の熱さと、仮眠のあとのけだるさに目が覚めたのは、三時間ほど後のことだった。

眠り過ぎだ。

守谷は椅子から飛び降りた。彼女は多分もう来ている。時間を無駄にするわけにはゆかない。

守谷が寝室へ行くと、女はいつものように、ベッドの上に横たわっていた。全裸でうつ伏せになり、静かに寝息を立てていた。

そつと室内に足を踏み入れると、守谷はしばらくの間、女の姿を黙って眺めていた。手で触れるかわりに、視線で彼女の肌をゆっくりと愛撫した。彼女の全身は、室内の灯りを吸収して放出しているかのように、うつすらと発光していた。それは寝息に合わせて、ゆるやかな明滅を繰り返した。

豊かな起伏と滑らかな肌の質感を、彼は、脳の中のクロッキーブックへ、舐めるように丁寧に描き留めた。何度見ても初々しい彼女の身体。そして、その内部で逆巻いているに違いない、燃えたぎる血と深い情念。彼女を描くだけで、百枚、千枚の違った絵が描けそうだと守谷は思った。守谷がベッドの端に腰をおろし、スプリングが軋んだのと同時に、女は身じろぎして目を開いた。ショートボブの髪を揺らしながら顔を上げ、仰向けになった。豊かな胸と、腰から下の全てが露わになった。

「……ごめんなさい。わたし、また眠っていたのね。どれぐらいの間っ..」

「大丈夫。今来たところだから」

「わたしが眠っている間、ずっと見ていたの?」

「ああ」

「……恥ずかしいわ。みつともない真似をしていなかった?」

「そんなことはない。綺麗だったよ。何と言えればいいのかな……。蛭みたいに、体全体が光ってた。起きている間は、光らないのかい?」

「自分がどうやってたら光るのかなんて、わたし知らないわ」

「そうか。でも、とても素敵だったよ」

「どんなふうに?」

「うん。たとえば天の河を見ている時に綺麗だなあと思ったり、生まれて初めて玉虫のメタリックな色合いを見た時に感じた驚きや、理科の実験で、マグネシウム・リボンが燃えるものだと思った時の感動。そんな感じに近いかな」

「何だか、人間以外のものを見た時の感動と、同じように言つのね」

「仕方がないよ。君は人間を超越した存在なんだから。ヒトの形をしているくせに、中身はヒト以上なんだ……。」「以上』ということはないわ。わたしはただ、この世で、あなた達とは違う働きを、担っているだけなんだから……。」「……」

「何でもいいよ。それより、今日も見せて貰えるのかな」

守谷は女の手をとり、口づけした。「君だけが知っている世界。おれが知らない、広大な世界の秘密を」

「ええ。見せてあげるわ」女は、守谷の全てを受け入れるように微笑んだ。「いくらでも見せてあげるわ。さあ、わたしの中へ入ってきて。好きなだけわたしを味わって。わたしの体を通じてあなたが見るものは、全て、最初からあなたに約束されているもの。だから、幾らでも持って帰っていいのよ。好きなだけ、自分のものにしていいのよ…」

「ああ、そうするよ。そうせずには、いられないんだから」
守谷は女の上に覆い被さった。二人はシーツの上で柔らかに抱擁を交わした。女の指は守谷のシャツのボタンに伸び、守谷の両手は、女の胸から腹、腹から腰へと優しく撫でながら、しっとり熱を帯びた大腿部へと滑り降りていった。

女は身を振りながら、次第に、体全体を桜色に染め始めた。守谷は、前のはだけたシャツをもどかしく脱ぎ、スラックスをベッドの脇へ投げ捨てた。裸になって、再び、彼女ともつれ合った。唇で愛し合い、肌で愛し合った。お互いの敏感な部分に触れ、切ない吐息と喘ぎ声を洩らし合った。

ああ、見えてきた　と守谷は思った。全身を、波のよ

うに駆け抜けてゆく心地よさに翻弄されながら。おれのために約束されている未来、おれがなすべきこと。何を描けばいいのか、何を描けば売れるのか。どんなものが皆から求められているのか、おれはどんな絵描きになればいいのか。

形のない色彩と、瞬間瞬間に形を変えてしまう様々なイメージの激流。それが、守谷の頭蓋骨の中を反響した。彼は必死になって、そのイメージを、頭の中のF15号大のスケッチブックに描き殴る。イメージの断片から、またたくまにエスキースが作成され、主線が形を成し、色とりどりに彩色されるが、出来上がった絵は出来た時と同様に、あっというまに粉々になって消え去ってゆく。そして、また別のイメージが、頭の中で形を取り始める。一番良いものはどれなのか、脳の中の制御のきかない部分が、次から次へと試作しているかのようだ。

その過程の激しさに、彼は翻弄され、ボロボロになりかける。が、意志の力でその流れを見極め、流れに乗り、力の続く限り試みを繰り返す。繰り返しているうちに、体が甘い蜜の中に浸っているような快感を覚え始める。突如として感受性のレベルが跳ね上がり、全てが弾ける瞬間まで、彼は全身でそれと格闘し、それを味わう。

可能な限り、記憶に刻み込んで持ち帰るのだ。交わりが終わればイメージは拡散してしまふ。だから消すな、こ

の素晴らしい体験から得られる記憶を！ 自分が味わっている世界の、色と味と、匂いと痛さを。自分に約束されている可能性の全てを。「未来に描くかもしれない作品」の全てを。彼女の体を通して、自分の感覚が、広大な空間に向かつて開かれている間に、おれは、そいつを持ち帰るのだ。

全部持っていつていいのよ、と女は繰り返す。生活の厳しさの中で人々が求めているもの、芸術という領域に人々が期待するものを。あなたが描くべきものを拾ってくるのよ。何が見えるの？ 何が感じられるの？ わたしの中であなたが獲得するもの それは、あなたに創造の種子を与えてくれる。創造の源を潤してくれる。あなたの未知の領域を押し広げ、古いあなたを粉々に打ち砕いてくれる。新しいあなたの礎石となる。

背中と腰の筋肉に力を入れ、身を反らしながら、守谷は、女の中で最後の瞬間を迎えた。暴れ狂う快感が脳へと突き刺さる。細やかな痙攣が、背筋に沿って這い昇る。呻き声と共に彼女の中へ放出した、灼けつくような情熱と引き替えに彼が得るものは、真っ赤な瑞々しい血が通った、この世にただ一つの芸術の種子。心の底から人々を震わせ、感動させ、時には怯えさせもする、彼にしか作れない作品の原型のかけら。

渡瀬のログハウスで、みづともない酔い方をしたあと、北澤は、叔父の手助けで自宅に運び込まれた。

悪酔いはしていたが、食べたものを全部吐いてしまうほど、彼は酒に弱くはなかった。ただ、頭痛がひどかった。締めつけられるというよりも、半ば殴られているような頭の痛みに、ベッドの上でのたうち回らねばならなかった。

「真面目にやり過ぎてるんじゃないのか」からかっているのか、本気で心配しているのか判別がつかないような口調で、渡瀬は言った。「仕事もライフワークも適当に手を抜くことだな。守谷くんを見る。実に器用に立ち回っているじゃないか」

「守谷と比べるのはやめて下さい」「北澤は、吐き捨てるように言った。「頭痛がひどくなる……」

「彼に勝ちたいか、隆史」

「……まあね」

「だったら、勝てる方法を教えてやる。そうすれば、ベッドでダウンしているのは、おまえではなく、守谷くんのはづになるだろう」

「その気があれば自分で実行していますよ。変な妄想は吹き込まないで下さい。吐き気がする」

「気弱だな」

「それだけが、おれの取り柄ですから」

「憎んでみたいとは思わないのか、守谷くんを」

「どうして？ そんなこと、意味のないことでしょう」

守谷は叔父さんとは違うんだ、北澤はそう言いたかったが、あえて口をつぐんだ。

北澤は、守谷の作り手としての誠実さに尊敬を覚え、人間的な魅力に惚れ込んでいた。守谷は持っている。どんなものの中にも美を見い出すことのできる才能を。人々が見過ごしている些細なものや、目をそむけてしまうような醜いものの中にも、普遍的な美が存在していればそれを見抜き、抽出し、作品という形で結実させる能力を備えている。その美しく大らかな存在を、どうして、おれが自分で叩き壊さなければならぬんだ？ つまらない嫉妬や、競争心から……。

渡瀬が、しきりに何かを提案していたように思えたが、その直後から、北澤の記憶は完全に途切れた。

不甲斐ない甥を放置して早々と引き上げてしまったのか、翌朝、渡瀬の姿は室内のどこにもなかった。泊まっていた形跡すらなかった。

叔父にも、見捨てられたのか……。

北澤は、よろよると起き出して、冷蔵庫にあったペットボトル入りのスポーツドリンクを、がぶ飲みした。

それからベッドへ戻り、思った。

書かなければならない。名誉や成功のためなんかではなく、自分自身のためにだ。

ここでやめたら、自分は、守谷と友人でいることすらできなくなってしまうだろう。勿論、それでも構わないとも言えた。自分には運も才能もないのだと、全てを捨ててしまうことも一つの生き方だ。だが、そんな選択をするとは、北澤にとって、今の苦境よりも恐ろしいことだった。自分の未来に対して、何も望まず、何も期待しない生き方。それは、もしかしたら、静かな悟りに満ちた、充実した生き方なのかもしれない。生きるための知恵に満ちた、新しい道への最短距離。だが、刺激と情熱を常に求め続けてきた彼にとって、それはあまりにも味気ない人生に思えた。想像するだけで背筋が寒くなった。恐ろしさのあまり、けたたましく笑い出したくなるほどだった。北澤にとって、そんな生き方は、死んだも同然の生き方だった。それならまだ、失意に狂って自滅してゆくほうが、よほど人間らしい生き様のように思えた。

勿論、だからといって、意図的に坂道を転落してゆくつもりはなかった。北澤は思った。道は一本ではない、そのうち何とかなるだろう。脇道や寄り道を見つけないがら進んでゆくのは自分の特技の一つだ。おれは、それでゆけばいい。

翌日から、北澤は自分の日常に戻った。昼間は雑誌社の仕事に走り回り、夜や週末には、ICレコーダーに吹き込まれたインタビューの書き起こしを行った。

ルポルターージュの執筆のため、毎日、夜中までパソコンのキーを叩いた。石のように固く張りつめた肩の筋肉をほぐすため、ストレッチ運動をしては、濃いコーヒーを飲み、疲労で鈍りがちな頭を目覚めさせた。

書いている間だけは、何もかも忘れることができた。昼間の仕事のこと、叔父のこと、守谷のことすら。時々、自分は壮大な時間の無駄使いを　意味のないことを積み重ねているだけなのではないのかと思えることもあったが、人間、誰しも無駄なことばかりやっているのだと考え、気を取り直した。

何日か後、北澤は、書店で一冊の美術雑誌を見かけた。関西の若手画家十人を特集した号だった。その取材相手の一人として、守谷が選ばれていた。ページをめくると、中には、自分の絵と一緒に写っている彼がいた。そして、半ページほどにわたるインタビュー記事。守谷は、自信に満ちた口調で、自分の芸術観と、これからの目標を語っていた。自分の才能を全開にして、語り尽くせない情熱を溢れさせていた。

北澤はその雑誌を買い、自分の家で何度もページを眺

めた。胸に迫ってくる何かを感じ、心が大きく揺れ動いた。

飽きるまでその記事を読み、隅々まで記憶してしまうと、彼は雑誌を、書棚の奥に押し込んだ。それから自分のパソコンに向かって、猛烈な勢いで、自分の原稿を書き始めた。

自分が今、ここでこうしていられるのは守谷のおかげだ、と彼は思った。守谷が先を走っているからこそ、自分も、その背を追って、前へ進もうとしているのだ。と。

(6)

一年以上の歳月が流れた。

絵が売れるようになってからの守谷は、北澤とは、あまり会わなくなっていた。かつては自分と一緒に飲んでいた時間を、今では、画商や新しい仕事仲間と共に忙しく過ごしているのだろう。北澤はそう判断し、積極的に彼を誘うことを控えていた。ただ、時々、彼宛てに書き送る電子メールの中で、機会があればまた会いたい、いつでも飲みにゆこう、と書くことだけは忘れなかった。

北澤自身の生活に変化はなかった。雑誌社での多忙さは相変わらずだったし、自分のルポルタージュが売れるなどという幸運にも、まるつきり恵まれなかった。が、そのことに、以前ほどの不満は感じていなかった。嫉妬と羨望の対象が目の前から消えたことで、気分が落ち着いたのであるかもしれない。あるいは、日常の仕事が忙し過ぎて、そういうことにエネルギーを回す余裕がなくなっただせいかもしい。そういう意味では、忙し過ぎる自分の職種と、守谷と疎遠になっていることに感謝せねばならなかった。そんな自分の弱さに後ろめたさを覚えなくてもなかったが、後ろめたいところのない人間などこの世には存在しない、と思っている彼にとって、それは別に恥ずべきことでも、唾棄

すべきことでもなかった。勿論、誇るべきことでもなかったのだが。

少なくとも、余計な回路にエネルギーを送り込んで、オーバーヒートを起こすよりは、よほどマシに思えたのだ。それは北澤にとって、ささやかだが、いずれはどこかで得る必要のあった、大切な教訓の一つだった。

そんな頃、北澤の元へ突然、守谷から電子メールが届いた。「会いたい」というメールだった。久しぶりに飲んで騒ぎたい というようなことが書かれていた。

北澤は、素直にそれに応じた。嬉しかった。守谷が自分を忘れないでいてくれたことが。

二人はJRの駅前で待ち合わせ、馴染みのパブへ足を運んだ。

「悪いとは思ってたんだが、仕事が忙しくてな」

久しぶりに会った守谷は、昔の彼とは、随分雰囲気違っていった。元々端正な男だったのが、今では、大輪の華が開いたように垢抜けた雰囲気になっていった。服装のセンス、世間慣れた物腰と表情。以前より、はるかにとっつきが良くなった分、容易に本心を見せない、したたかさも備えているように思えた。地味な誠実さは影を潜め、代わりに、抜け目のなさのようなものが時々滲み出る。北澤は、そのこと自体に不快感を覚えたりはしなかった。よ

うするに、守谷も年相応に草臥れてきたのだろうと思っただけだった。加齢は人を嫌でも変えてしまう。自分も守谷も、もう、青年期を終えようとしているのだなと、しみじみと感じた。

二人はボックス席に座り、スツチを、オンザロクで注文した。

「なんだか、十年ぶりぐらいに会ったような気がするな」
守谷が言った。「でも、おまえは全然変わってないんだな。一緒にいると、何だか、とても懐かしい場所へ帰ってきたような気がするよ。」

守谷は自分の近況について、とんどん話した。自分の絵の値段のこと、雑誌社のインタビューを受けた時のこと、気に入らない取引先と喧嘩をした時のこと、以前から欲しがっていた高価な絵の具を購入して作品を描いた時の喜び。話題は、ひっきりなしにあちこちへ飛び、目まぐるしく展開しながら続きに続いた。

さすがに、自分から呼び出しただけのことはあるな、と、北澤は半ば呆れながら話を聞いた。守谷は自動機械のように喋った。不自然なぐらいに陽気だった。

最初のうち、北澤は彼の話に集中していた。吃驚したり、感心したり、大笑いした。だが、一方的に喋り続け、こちらの話をあまり聞こうとしない守谷に、次第に抵抗を覚え始めた。

「なあ、守谷」

「何だ」

「今話した題材について、どう思う？ ルポとして売る価値があると思うか？ もしおまえが読者だったら、絶対に、本屋のレジまで持ってゆきたくなくなるような内容だと思うか？」

「うーん、難しいなあ」守谷は、面倒くさそうに答えた。「おれ、活字出版のことはよくわからないだよ。専門家に聞いたほうがいいんじゃないの？ それより、おれ、このあいだニューヨークで建築家のパーティーに出席してきたんだけど、そこで、ものすごく変な男に会ってなあ……」

華やかな生活をしている分、守谷のほうに話題が多いのは理解できた。が、北澤自身、守谷と話したいことはたくさんあった。相談したいことも山ほどある。なのに耳を傾けようとしない守谷に、北澤は苛立ちを覚え始めた。解決したつもりだった羨望と憎悪が、自分の中で、再び鎌首をもたげつつあるのを彼は感じた。どういつつもりなんだ。まさか、自慢話をするために、おれを呼んだわけじゃないんだろうな？ それとも、おまえの人生と比べたら、おれのは退屈で聞いてられないということなのか……。

オンザロックを何杯も重ね、守谷は機嫌良く酔っていたが、そのうち疲れてきたのか、さすがに口数が減ってきた。北澤も、いい加減うんざりしていた。一方的に話を聞く

のがこんなに大変だとは思ってもみなかった。

北澤は時計を見た。終電までにはまだ間があった。彼はふと、守谷を追いつめてみたくなった。多少の悪意を交えて。逆襲のつもりで。

「おまえ、今でも山へ鳥を撃ちにいってるのか」北澤は、さり気なく切り出した。

「ああ」守谷は欠伸びながら答えた。「叔父と一緒にか」

「一緒の時もあるし、一人の時もある」

「金が掛かるんだろ。猫をするのって」

「困らないぐらいの収入は、ある」

「一人で、ログハウスに泊まったりとかもしてるのか」

「たまにはな」

「何をしてるんだ。そういう時には」

「別に……。星を見たり、本を読んだり」

「星か。懐かしいな。夏になったら、おれも一緒に泊まらせてくれよ」

「……」

守谷がふいに黙り込んだ。北澤は彼の心中を量りかねた。以前の守谷なら、「こういう時にはすぐ」「ああ、いいとも」と、笑顔と共に答えてくれた筈だ。なのに今日はそれがない。何かを隠しているのだろうか？ 勘を働かせ、北澤は意地悪く追求を続けた。「なるほど。さてはおまえ、あそこを、ラブホテル代わりに使ってるんだな。だから、

女の子以外は連れて行きたくないんだろう。ひどい奴だなあ。あれは叔父の私物なんだぞ。ちゃんと、許可貰ってやってるのか？」

突然、守谷がムツとした表情を見せた。「当て推量で物を言うのはやめてくれないか。おれは、おまえの雑誌の取材相手じゃないんだぞ。下品な言い方をするのはやめてくれ」

無論のこと、北澤はやめる気などなかった。素直に謝ればまだ引き返せる段階だったが、逆に、今まで以上に嫌味を込めて言い返した。「下品で悪かったな。だが、本気で怒ることはないだろう。ただの冗談じゃないか。それとも凶星だから怒ってるのか？ おれはおまえを取材しているつもりはないし、その女を紹介してくれなんてことも言っていないだろう。だが、隠すことはないじゃないか。それとも、隠さなきゃならないような相手なのか？ 人妻だとか、未成年だとか、金目当てで寄ってくる類の女だとか」

「よせと言ってるだろう、彼女はそんな女じゃない！」

守谷は、北澤の予想以上に怒って、彼の胸倉を掴んだ。やっぱり女がいたのか、と思って北澤は満足し、にやりと笑った。むやみに騒いだりせず、じっとしていた。守谷が周囲の客達の目を気にし始めるのを待った。が、守谷は興奮を納めなかった。ちよつとまづかったかな、と北澤は思っ

た。いつもはどんなに飲んでも冷静な守谷が、今日に限って随分荒れ気味であることに、北澤は遅ればせながら気づいていた。冷や汗が背中を流れた。どうやって宥めたものかと、酔いで鈍った頭を回転させた。

守谷は荒っぽい口調で言った。「取材しているつもりはな」と言ったな、北澤。でも、今のおまえの口振りは、芸能リポーターの喋り方とそっくりだぞ。仕事と私生活の会話の区別ぐらいはつけるよな。失敬な」

守谷は、北澤をソファの背に突き飛ばした。周囲の目が気になったのは北澤のほうだった。カウンターで心配そうな顔をしているバーテンダーに、北澤は「何でもないんだ」という意味の言葉を目で送った。バーテンダーは行儀良く視線を逸らし、掌の中のオンザロック用の大きな氷を、アイスピックで砕き始めた。

ソファの上で座り直すと、北澤は上体を前へ傾け、テーブルの上で掌を組み合わせた。少しだけ笑ってみせながら言った。「……仕事柄、いろんな奴からいろんなことを言われるが、まさか、おまえにまで芸能リポーターよばわりされるとは思わなかったよ。ちょっとショックだったな。そんなに気を悪くしたのかい。おれは、冗談のつもりだったんだけど」

守谷は沈黙していた。厄払いでもするように、荒々しくグラスの酒をあおった。

北澤は続けた。「昔はおれ達、女のことでも気兼ねなく話し合ってたじゃないか。困ったことがあったら、お互い知恵を出し合って。おれは、そのつもりで」

「そうやって、面白おかしく、お互いの境遇について語り合う時期は、もう過ぎてるんだよ……」

守谷が、アルコールで潰れたような声で、ぼそりと呟いた。店内の照明が、ふいに暗さを増したように感じられた。北澤は、苦い果実を奥歯で押し潰した時のように、寂しさを一人で噛み締めた。

「それに彼女は」と、守谷は少しだけ口調を和らげた。「そういう話題を、おまえと共有するほど俗な存在じゃないんだ。おれにとって彼女は人生の全てだ。いや、人生そのものだと言っている」

眩暈がした。どうやら自分は、結婚でも守谷に先を越されることになるらしい、と気づいた北澤は、嫉妬半分、羨望半分の気持ちで言い返した。「わかったよ。悪かった。何でも好きなようにやってくれ。だが、おれ達は長年つき合ってきた親友じゃないか。言葉は選んでくれよ。これじゃあ、祝いの言葉を言う気にもなれやしない」

守谷は頬杖をつき、掌で顔を撫で回しながらくすりと笑った。「親友か……。だが、おまえがおれのことを良く思っていないのは、おれも自分でよくわかっているよ」

北澤は穏やかに問い返した。「どついう意味だ」

「おまえから見て、今のおれは、どんなふうに見える？ 売れっ子の仲間入をした新鋭若手画家か？ 世渡りの上手なイラストレーターか？ 自分の夢を叶えて、別世界へ飛び立つていった憧れの友人か？ アハ、違うね。全然、当たっていない」

守谷は、テーブルの端に置いてあったマッチに手を伸ばした。煙草を吸うわけでもないのに、紙マッチを一本むしり取って火をつけ、指先が焦げそうになるまで、その焰をじっと眺めていた。

北澤が注意すると、彼は灰皿へ燃えカスを落とした。そして、また同じ動作を繰り返した。

「最近、売れてないんだ、おれの絵」

マッチを擦り続けながら、守谷は投げやりに笑った。「売れたのは最初の一・二年だけ。あとは全然さ。ホームページのデザインを請け負っている時のほうが収入があるくらいだ。フリーの絵描きっていうのは、本当に大変だな。こんなこと、始めなきゃ良かったとすら思ってるよ」

北澤は絶句した。目の前が一瞬、大きく揺れた。「でも、雑誌に特集が載ったりしてたじゃないか……」

「だからって、急に絵が売れるわけじゃないよ」

いつのまにか、守谷の顔からは笑みが消えていた。代わりに、陰鬱な影が徐々に広がりつつあった。しまった、こんな話題を喋らせるんじゃないかと、と北澤は後悔したが、

もう遅かった。守谷は次第に、彼の目の前で心の淵を広げつつあった。親しい間柄と思って安心したのかもしれないが、この手の感情がひどくやっかいなものであることを、北澤は自分でも、嫌になるほどよく知っていた。この種の愚痴は、言えば言っほど、言った人間から生きる力を奪ってゆく。そして、生きる力を失ってゆくことほど、物を作っている人間にとって恐ろしい敵はないのだ。

「おれだって、頑張らなきゃなあとは思ってるんだ」守谷は、目を瞑ったまま呟いた。「こんなのはよくあることだ。こういう地味な期間を我慢しているうちに、またいい時期も巡ってくる」

「そつだよ」北澤は、守谷がある程度わかっていることを知って安堵した。「まだ先は長いんだし、おまえぐらい実力があれば」

「頭ではわかってるんだ。だが、体のほうがついてゆかない。イライラして集中力がなくなってくる。夜眠れない。やらなければならぬことは山ほどあるのに、気持ちがつまなく乗ってゆかない。嫌になる、何もかも。周囲にあるものを、手当たり次第にぶち壊してやりたくなる。街路樹で雀が呑気にさえずっているのを見ると、捕まえて、絞め殺してやりたくなるんだ」

刺々しい口調の裏で、心が激しく揺れ動いているのが、北澤にも感じられた。何と言って慰めればいいのか、言葉

に迷った。

今夜の守谷の陽気さは、不安から逃れるための必死の抵抗だったのだ。笑って帰りがたかったのだ、守谷は。親友から境遇を誉めて貰い、喜んで貰い、気持ちよく酔っぱらって……。久しぶりに酔って騒ぎたい、そう書いてきたのは守谷のほうだった。甘えなかったのは、守谷のほうなのだ。

それを、彼の弱さだと非難することはたやすかった。何を贅沢なことを言ってるんだ、甘えるな、ちゃんと自分の足で立て。そう言ってるべきだった。突き放すべきだった。何かを得た者のそれは当然の義務であり、支払うべき代償なのだから。勝ちっぱなしの人生など、あるわけがない。だが、できなかった。少し前まではそのつもりでいたくせに、自分の気の弱さを、北澤は心底嫌悪した。

守谷は、紙マツチを全部擦ってしまうと、酔いで潤んだ眼で北澤をじつと見た。「……北澤。おまえだって本当は、おれのことを、たいしたことのない奴だと思ってるんだろっ？ 調子に乗って飛び出したものの、力が足りなくて転落したみじめな奴だと思っている。いい気味だと思って蔑んでるんだ。いや、絶対にそっくに違いない」

「何を言い出すんだ」困惑が、北澤の胸を詰まらせた。「もう帰ろっ。帰って寝たほうがいい」

「嘘をついてないで、本当のことを言えよ」再び声を荒らげ

て、守谷が詰問した。それは、彼の内面の悲鳴そのものだった。「おまえは心の底で、本当は、おれのことを馬鹿にしてるんだ。自分のほうが才能がある筈だ、守谷光二が世に出られるくらいなら、自分が出世できないのはおかしいと考えている。きつとそつだ。親切そつなふりをしてたつて、本心では、おれのことを憎んでるんだ。蔑んでるんだ。軽蔑しているんだ」

「いい加減にしてくれよ!」

思わず叫び出しそつになつたのを、北澤は、かろつじて抑えた。

嫉妬。確かに嫉妬した。北澤は守谷の才能に、その運の良さに。彼のような天分が、ほんの少しでも自分にあつたらと、どんなに悔しい思いをしたことだろう。だが、だからといって彼を憎んだことなど一度もない。羨ましいとは思つても、馬鹿にしたことなんか一度もない。こいつは何を勘違いしてるんだ。おまえこそおれを蔑んでるじゃないか。生活に流されて敗北した人間として、見下しているんじゃないのか!

「……家……そつだ、家に帰らなきゃ……彼女が待つてるんだ……」

守谷は思い出したように呟き、よろけながら椅子から立ち上がった。北澤は彼を、すがりつくように見上げた。「守谷。また昔みたいに絵を見せてくれよ。おまえはいつ

も、新作ができる我真つ先におれに見せてくれたじゃないか。おれは二、三年ほど、おまえの絵を全く見ていない。見せて貰っていない。色彩のオーケストラ。100号の画布いっぱい描かれていたおまえの魂を、おれは今でも、忘れることができないのに。」

「絵なら、松井画廊のオーナーが何枚でも持つてるよ。行けば、いくらでも見せてもらえるさ……」

守谷は、自嘲するような笑みを浮かべた。ひきつった頬の筋肉の動きに、疲労と絶望が滲み出た。北澤は、自分の体の中心から湧きあがってくるものに、息がつまりそうになった。怒りとも憐憫ともつかない感情が、胸の中を掻きむしり、暴れ狂った。

守谷は札入れから一万円札を数枚抜くと、テーブルの上に投げ出して店を出た。北澤はそれを掴んで支払いをし、彼の後を追った。

北澤から離れたかと思っているのか、守谷は既に、暗い路地をずっと先まで進んでいた。足取りが少し危なかったが、追いついて声をかけても、怒鳴られるだけのようないきがして、追うのが躊躇われた。

諦め、北澤はネオンの洪水の中を一人で歩き始めた。どうせ駅の方角も違うのだ。

自分の払った飲み代よりも、守谷が置いていった金額のほうかはるかに多かったことが、妙に物悲しかった。